

学びの匂いが充満する学校を目指して

「はたらけど、はたらけど、猶わが生活楽にならざり、ぢつと手を見る」労働者の苦悩を吐露した石川啄木の短歌です。明治時代、日本は、紡績・製糸・製鉄の急速な近代化を一気に進めましたが、長時間や低賃金、不衛生な環境下など、労働条件は、とても過酷でした。

時は流れて、昭和になり、母親の思いを綴ったコミカルな曲がヒットします。「働け、働け働け鉄矢、働いて働いて働きぬいて休みたいとか遊びたいとか、そんな事おまえいっぺんでも思うてみる、そんな時はそんな時は死ねそれが人間ぞ、それが男ぞ♪」男は仕事、女は家庭のステレオタイプが男性を懸命に働かせていた時代のことです。さらに年号が平成へと変わる年、「24 時間働けますか！ ビジネスマン、ジャパニーズビジネスマン♪」雇用が増え、働けば働くほど給与も上がっていくバブル景気となり、休日を返上して昼夜問わず働くことが成功に直結する考え方として、社会全体に浸透していきました。社会人のマナーを教えるとの理由で上司に夜通し連れまわされても、忠誠が出世を左右すると信じられておりました。

しかし、日本の労働が狂気の象徴と認識される「過労死」が社会問題へ発展すると、仕事は、生きるためではなく、生きている証としての認識が高まり、ライフワークバランスの標語と共にこれまでとは違う働き方を定着させます。「経済の動向も通勤時チェック純情な精神で入社しワーク社会人じゃ当然のルールです♪酒が空いたグラスあれば直ぐに注ぎなさい皆がつまみ易いように串外しなさい♪はぁ？うっせえうっせえうっせえわ」時代を反映する曲も若者の心を捉えます。

ところが、先ごろ、自由民主党初の女性総裁は、「ワークライフバランスを捨て、働いて、働いて、働いて、働いて、働きます。」と発言しました。政治家の覚悟として受け止める人もいますが、このような捨て身の勤労意欲を国民はどのように捉えるのでしょうか。

私は、40 年近い教職人生の中において、若かりし頃は、お腹の空いた子どもたちのために自分の頭をちぎって与えるアンパンマンのような存在が理想の教師像だと思い込み、父危篤の連絡にも、迷わず生徒の待つ教室に向かっていました。しかし、自己犠牲を教師の美德とする考え方は、学校の先生がブラックと揶揄される要因の一つになっています。

また、昇進や出世を避ける人が増えている中で、学校が仕事に対して献身的であることを高く評価するのは、時代遅れと言わざるを得ません。このような企業文化を制度として取り入れていれば、教員のモチベーションは高まっていかないでしょう。なぜなら、教師の成果や意欲の評価は、人材育成を理由に高い水準へと誘導することで「やります」と言わざるを得ない状況に陥らせるとともに、異議を唱える教員を不利に扱うなど、チーム学校を唱えるも、結果的に仲間同士の競争や使い勝手の良い教員を求めているに過ぎないからです。

私は、私学での経営を任された今、「命より大切な仕事はない」との強い信念をもち、学びの匂いが充満する学校づくりに邁進しています。教師を評価して校長の権限を強化した平成の成功事例にしがみつくとなく、不足な事態が生じた時こそ、「大丈夫、後は俺に任せろ」と自らスタッフの一人として汗をかき、先生、そして学校を支えていくことで、誰もが安心して働き続けられる職場にすることが私の目標です。

令和 7 年 10 月

